

# 色彩教育における「マンダラぬりえ」の活用に関する分析・考察

○小川 直茂(岐阜市立女子短期大学) 藤田 篤(日本知育玩具協会)

## 1. はじめに

塗り絵は、近現代に幼児を中心とした多くの対象者に親しまれてきた玩具である。特に近年は、幼児のみならず、大人を対象として図案の細密度を増した「大人の塗り絵」が人気を集めており、塗り絵への関心が社会的にも高まりを見せている状況といえる。

塗り絵の図案は、動植物や風景など現実的なモチーフから空想世界の産物に至るまで多岐にわたるが、それらの大半は具象物をモチーフとしている。そのような中、一般的な塗り絵とは大きく異なる特徴を備えた塗り絵として「マンダラぬりえ」がある。マンダラぬりえを世に広める上で大きな役割を果たしたのはアート・セラピスト兼カウンセラーの Susanne F. Fincher で、そのルーツは心理学者の Carl Gustav Jung が用いた心理療法にある。Fincher は著書『マンダラ塗り絵』(注 1)で、塗り絵への取り組みを通して精神的なリラクゼーション効果や集中効果の獲得を期待するものであると説明している。

マンダラぬりえの特徴として、図案が幾何学的な図形構成による抽象柄であることが挙げられる。また、その抽象柄が対称的に描かれていることや、円の中に収まる形で描かれていることなども、マンダラぬりえの形態が備える固有の性質と言えるだろう。抽象柄は塗り絵の制作者に特定のイメージを強要することがないため、それぞれの制作者が自由な発想で彩色を楽しむことが可能となっている。

マンダラぬりえは、当初セラピーの観点から注目を集め、その後、幼児を対象とした玩具としても広く受け入れられるようになった。現在では、ドイツをはじめとする海外諸国や日本においても、その普及の様子を目にすることができる。

## 2. 研究目的

芸術・デザイン系高等教育機関での教育において、色彩教育は非常に重要な位置を占める。色彩教育の内容には、理論的な学習に加えて実際に色彩を使いこなす技術修得のための実践学習も含まれ、その具体的な学習方法として、抽象的な配色構成による演習課題などが行われている。だが、こうした演習課題で用いる(あるいは生じる)図案の形態的性質の取り扱いについては、現時点で特に明確な指針が示されているとは言いがたい。このことから、図案の形態的性質と教育効果との関係性について、事例調査等を通じて知見を深めることは有意義だと考える。

そこで本研究では、個性的な形態的性質を有するマンダラぬりえを、芸術・デザイン系高等教育機関の学生に向けた演習課題として試用する。そして、演習課題の

成果物を分析し、色彩教育におけるマンダラぬりえの活用の可能性について考察することを目的とする。

## 3. 調査手法

2019年6月から7月にかけて、調査を実施した。調査対象は岐阜市立女子短期大学・生活デザイン学科に在籍する1年生66名である。調査方法の概要について以下に記す。

1年次の必修科目である「色彩学」の授業で、演習課題を出題した。演習課題のテーマは「四季の表現」とし、配付したマンダラぬりえ(図1)に対して春/夏/秋/冬の4種の季節を想起させる配色を施すように指示した。作品の配色表現に対する教員の中間指導や助言は実施せず、学生それぞれが自身のイメージする四季の配色を表現し、提出する形式を取った。提出された作品数は計264点である。

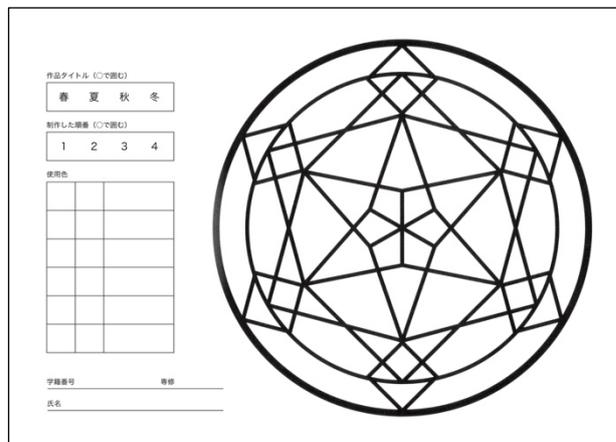


図1. 演習課題の配付用紙

その後、提出された作品の配色について分析を行った。分析にあたっては「マンダラぬりえが有する形態面の特性が、配色表現にどの程度影響を及ぼしているか」を明らかにする観点から、マンダラぬりえの特徴的な形態的性質として、①対称性 ②円環性 ③中心性の3点を分析項目として設定した。なお、これらの項目は、宗教学者でマンダラについて造詣の深い正木晃の著書『マンダラとは何か』の内容にもとづいている(注2)。

作品の配色についての分析と並行して、マンダラぬりえを用いた演習課題の印象に関するアンケート調査を行った。アンケート調査項目は ①作品の制作時は楽しかったですか ②作品の制作時は集中できましたか ③作品の出来に満足していますか の3点で、それぞれポジティブな回答(評価:5)からネガティブな回答(評価:1)まで5段階で回答する形式とした。この調査結果

と、別の時期に実施した(マンダラぬりえを用いない)演習課題の印象に関する調査結果を比較し、マンダラぬりえを演習課題に用いることで、学生の制作プロセスにどのような心理的影響が生じているのかを明らかにしよう試みた。

## 4. 調査結果

### 4.1. 作品の配色表現に関する調査結果

提出された作品の配色表現の内容について、前述の3項目に沿って結果を記す。

配色表現に対称性が見出された作品は全264点中の238点(90.2%)だった。円環性については全264点中の136点(51.5%)、中心性については全264点中の177点(67.0%)にその傾向が見出された。

対称性/円環性/中心性の3要素を全て有する作品は全264点中の121点(45.8%)で、全作品のうち半数弱がマンダラぬりえの形態的性質を色濃く反映した配色表現となっていることが確認できた。

一方、対称性/円環性/中心性の3要素のいずれも有しない作品は全264点中の26点(9.8%)だった。

### 4.2. マンダラぬりえの印象に関する調査結果

次に、マンダラぬりえを用いた演習課題の印象に関するアンケート調査、およびマンダラぬりえを用いない演習課題の印象に関する調査の結果について記す。

「①作品の制作時は楽しかったですか」の質問に対しては、マンダラぬりえを用いた演習課題で66名中40名(60.6%)がポジティブな回答(楽しかった/やや楽しかった)を選択した。一方、マンダラぬりえを用いない演習課題では66名中33名(50.0%)がポジティブな回答(楽しかった/やや楽しかった)を選択した。

「②作品の制作時は集中できましたか」の質問に対しては、マンダラぬりえを用いた演習課題で66名中49名(74.2%)がポジティブな回答(集中できた/やや集中できた)を選択した。一方、マンダラぬりえを用いない演習課題では66名中45名(68.2%)がポジティブな回答(集中できた/やや集中できた)を選択した。

「③作品の出来に満足していますか」の質問に対しては、マンダラぬりえを用いた演習課題で66名中37名(56.0%)がポジティブな回答(満足/やや満足)を選択した。一方、マンダラぬりえを用いない演習課題では66名中29名(43.9%)がポジティブな回答(満足/やや満足)を選択した。

## 5. 分析・考察

### 5.1. 作品の配色表現に関する分析

対称性/円環性/中心性のいずれも半数以上の割合で配色表現に反映されている様子が観察された。特に対称性については、全作品の90%以上という極めて高い割合となった。この結果から、マンダラぬりえの形態的性質が、演習課題の配色を考える上でアイデア立案自体に影響を及ぼした可能性が高いと考えられる。

ただし、配色表現の内容を詳細に確認してみると「対

称性はあるが、円環性や中心性は見出せない」「対称性と円環性はあるが、中心性は見出せない」「対称性と中心性はあるが、円環性は見出せない」など、配色の傾向に多様性が見られることが分かった。このことから、マンダラぬりえを演習課題に用いることで配色表現としての秩序性の増加傾向が見られる一方、「どのような秩序性を表現として用いるか」については制作者の判断に委ねられている部分が大きく、表現の自由度が担保されていると思われた。

以上の分析をふまえ、マンダラぬりえは「秩序性との親和性が高いテーマの配色表現」における題材として適していると考えられる。逆に「非秩序性や破調との親和性が高いテーマの配色表現」における題材としては適合しにくいと推察される。

### 5.2. マンダラぬりえの印象に関する分析

「①作品の制作時は楽しかったですか」「③作品の出来に満足していますか」の2項目について回答割合の差が10%以上となっており、傾向差が比較的顕著に表れていた。以下でその理由について分析する。

①は、マンダラぬりえの「対称的で規則的な図案」が、ポジティブな評価を得た一因ではないかと推察する。同種の図形が規則的に反復されるマンダラぬりえの図案は、特に秩序的な配色を計画する上での彩色の「見通しやすさ」に大きく影響している。制作中に完成イメージを容易に見通せることで、制作プロセス自体に楽しみを見出す効果が生じている可能性がある。この点をふまれば、マンダラぬりえを用いることで演習課題制作時のモチベーションを維持/向上する効果が期待できる。

③は、マンダラぬりえの「図案に備わる秩序性」が、ポジティブな評価を得た一因ではないかと推察する。マンダラぬりえでは、図案の持つ秩序性を活用した配色を施すことで、自然と作品自体の秩序性が構築される。その結果得られる視覚的安定感や心理的安心感が、作品の満足度を高める効果として機能していると考えられる。このことから、マンダラぬりえの活用が演習課題の達成感の創出、さらには学習への積極性の向上に寄与することが期待できる。

## 6. まとめ

本研究では、マンダラぬりえを色彩教育の演習課題に活用し、その効果について分析した。その結果、マンダラぬりえの形態的性質と演習課題の題材との適合性を明らかにした。また、マンダラぬりえの形態的性質が制作プロセスにもたらす影響について考察を行った。今後も色彩教育のいっそうの深化に向けて継続的に研究に取り組んでいきたい。

### 【注・参考文献】

1. スザンヌ・F・フィンチャー(著), 正木晃(訳): マンダラ塗り絵, 春秋社, pp.1-6, 2005
2. 正木晃: マンダラとは何か, NHK ブックス, p.269, 2007